



清水紅夫氏とその家族を高松に迎えて

昭和25年5月4日撮影 岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.88/12-2）

昭和24年に高田馬治は黒川正夫氏・清水忠俊氏と岡山県久米郡弓削町（現在は久米郡久米南町内）の清水家の別の末裔、清水紅夫氏を訪ね、屋敷跡と墓を調査しました。翌年に一行を高松に迎え、町長以下、町の要人とともに撮影した写真です。



高松町池の下の和気氏宅で

昭和24年3月13日撮影 岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.88/14-1）

明治42年に首塚の移転を行った、和気房右衛門氏の孫の和気弘氏の家で保管されてきた埋納物を実見したときの写真です。破損した首瓶（甕）を前に、左から和気弘氏、黒川正太郎氏、清水忠俊氏、高田馬治です。このとき高田馬治は、山上の持宝院にある旧地への返還を提案したものの、管理が行き届かないのを案じてか承諾を得られなかったことが、写真の裏側に記されています。

首塚埋納物の埋め戻し

昭和 32 年 6 月 4 日

岡山市立中央図書館蔵

(高田文庫 092.89/37-6, 19, 21, 10, 5, 9, 36)

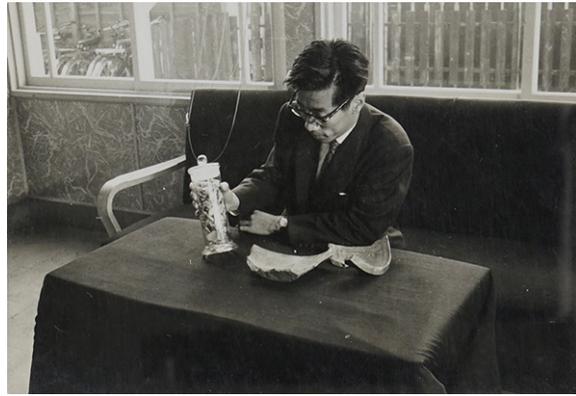
埋納物は昭和 32 年の宗治祭の日に、本丸へ移転されている首塚の地下へ保存措置を講じた上で再埋納されましたが、その一部始終が記録されています。

(右) 首塚の埋納物

埋め戻しの前に撮影された埋納物。左から、宗治の頭蓋骨とされる骨片、播鉢の破片、別れの酒杯とされる土器、自刃の懐刀とされる短剣です。



骨片をガラス製容器に入れる高田馬治



埋納部を感慨深く見つめる清水忠俊氏



首塚の埋納物を格納函に入れる清水忠俊氏



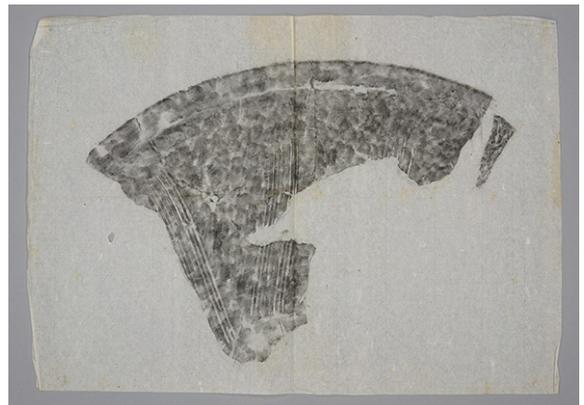
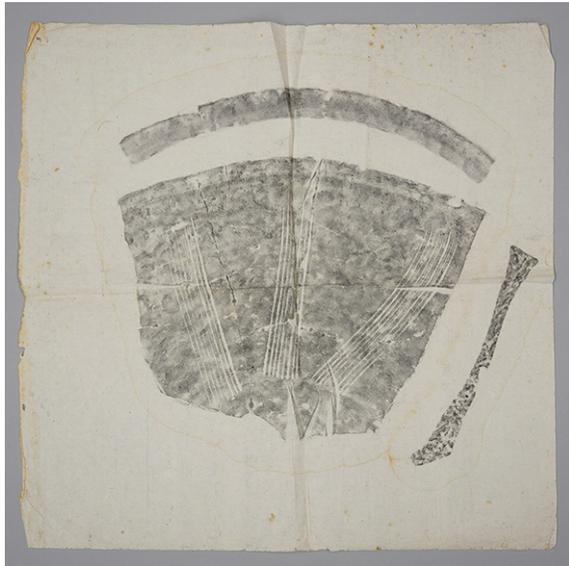
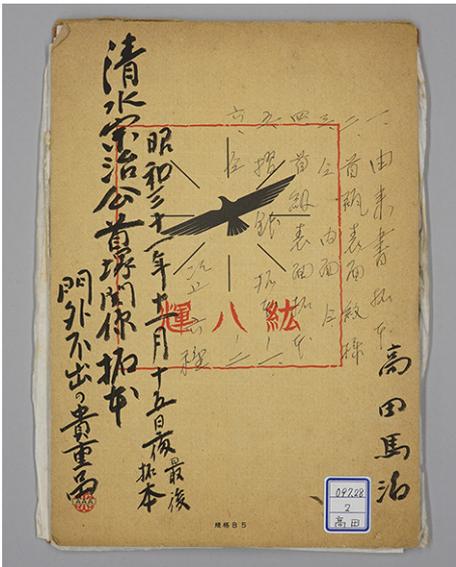
コンクリート製の蓋をする高田馬治



埋納を終えて喜び合う関係者（左は作業を手伝った高松農業高校土木科の学生たち）



宗治公鎮魂祭（埋納後に行われた鎮魂祭で、首塚移転の由来を高田馬治が参加者に説明しています）



10-3 「清水宗治公首塚関係拓本」から、
 拓本 12 点、写真 6 点、書付 11 点のうち拓本 6 点
 昭和 31 年 11 月 15 日
 岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 097.28/2）
 明治 42 年に和気房右衛門氏らが荒廃していた山上の持室院から
 首塚を本丸跡へ移転した後、石塔の重みで陥没し骨瓶が割れたの
 で和気家で保管されてきた埋納物を、孫の和気弘氏の了解で昭和
 31 年に調査し、作成した拓本です。これらの拓本の写真も別に
 残っています。

1 1 保存から継承へ

戦前の高松城址の保存活動においては、特に昭和初期になると、忠臣・清水宗治の顕彰を通じて国民精神の発展に訴えることがいわれるようになり、重要な古戦場であることから軍事史研究の一環として軍の関係者からも関心を寄せられていました。

そのような史蹟であることから皇族の来訪も多く、それぞれの機会に重要な歴史の舞台としての史蹟の意義を広く社会に示すことが行われてきました。高田馬治は大正 15 年に摂政宮（皇太子、後の昭和天皇）の行啓を案内したあと、本書の冒頭で紹介したように昭和 5 年には陸軍特別大演習の御前講演における進講者を務め、翌々年には高松宮夫妻を城址に案内しています。

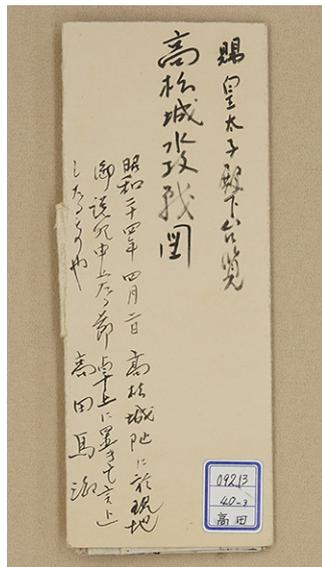
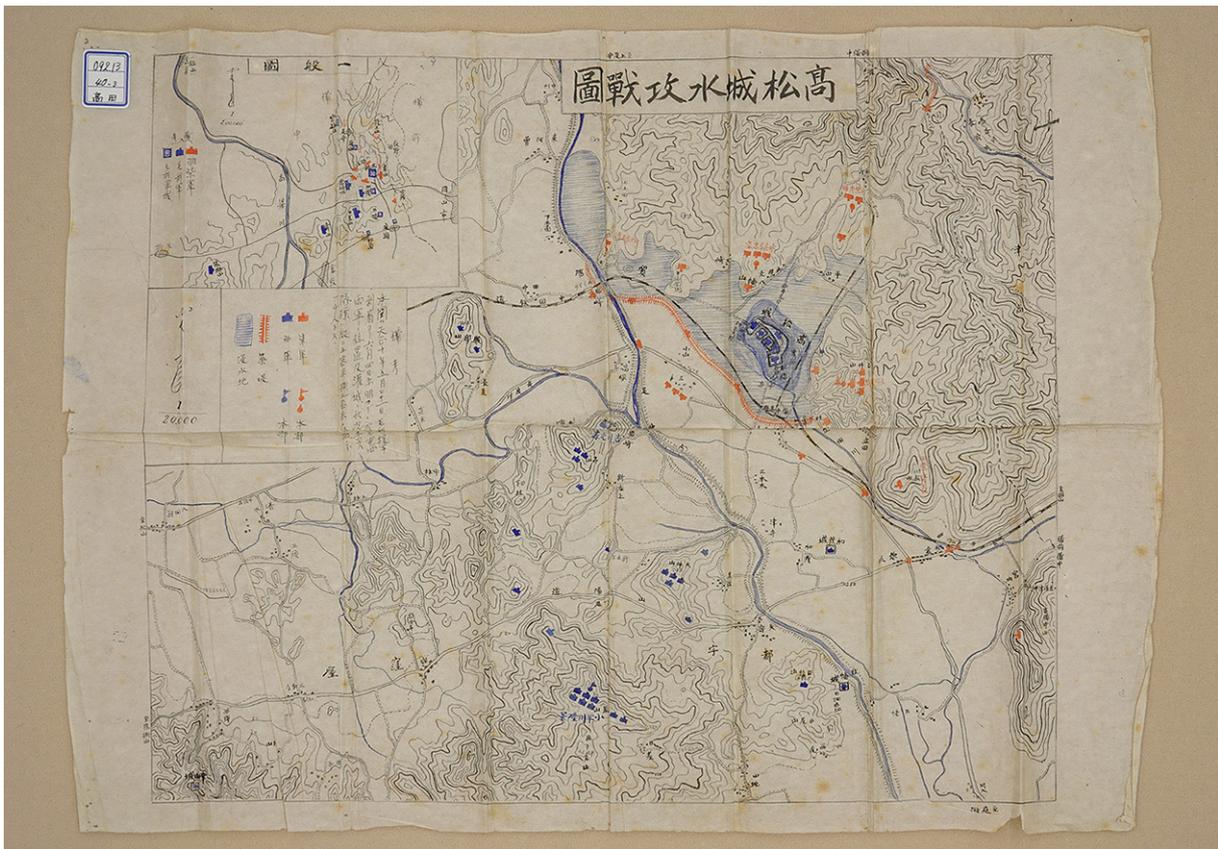
史蹟としての高松城址の意義は戦後になっても薄れることはなく、昭和 24 年 4 月 2 日にも当時の皇太子（現在の上皇）の行啓を迎え、高田馬治が現地で詳しく案内しています。

備中高松城の保存は地域内外の多数の人々によって進められてきましたが、その中でも大正期から昭和期にかけての時期を中心に、高田馬治が果たした役割は大きかったということが出来ます。

昭和 40 年には、かつて高松農学校で御前講演が行われたのと同じ 11 月 16 日に、高田馬治の胸像を設置する寿像除幕式が行われました。彼は銅像で顕彰されることを強く渋っていたそうですが、敬慕する人々の熱意に押されて受け入れたものでした。彼の胸像は、保存活動に多くの貢献を行った人であることから当時の文部省も史蹟内への設置を認めており、彼が生涯を捧げた城址の中に建てられています。

高田馬治が研究のために集めた資料やノート、原稿、写真、拓本などは、現在は岡山市立中央図書館と岡山市埋蔵文化財センターに保管されていますが、その総数は、目録上では 191 項目、枝番号になったものまで細かく数えると 700 点近くに達します。それらは高田馬治の活動を伝えているだけでなく、豊富な資料を通じて高松地域やその他の関係する人々が、どのようにして城址を史蹟として保存してきたかを知り手がかりとなっており、高田馬治とその前にいた多くの人々が思いを一つにして保存を果たしてきたことがわかります。

長野川の水奉行遺跡の破壊を嘆く書き入れのある新聞記事からうかがえるように、高田馬治の熱意は晩年になっても衰えることがありませんでした。保存に携わってきた人々の志は、私たちの気持ちを動かし、それが未来へ継承されることを願っているように思えます。

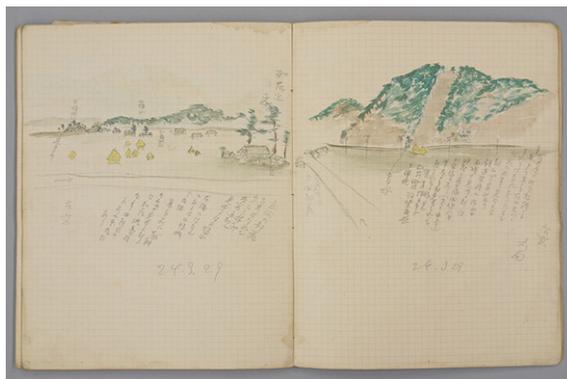
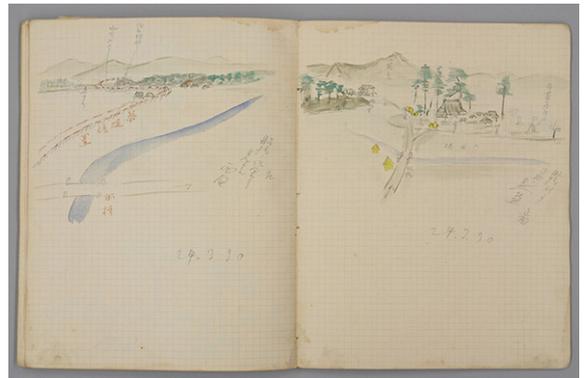
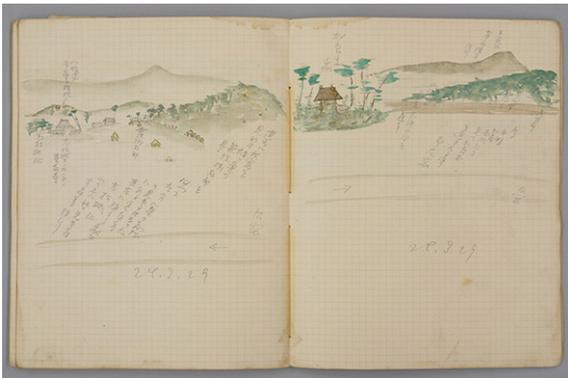
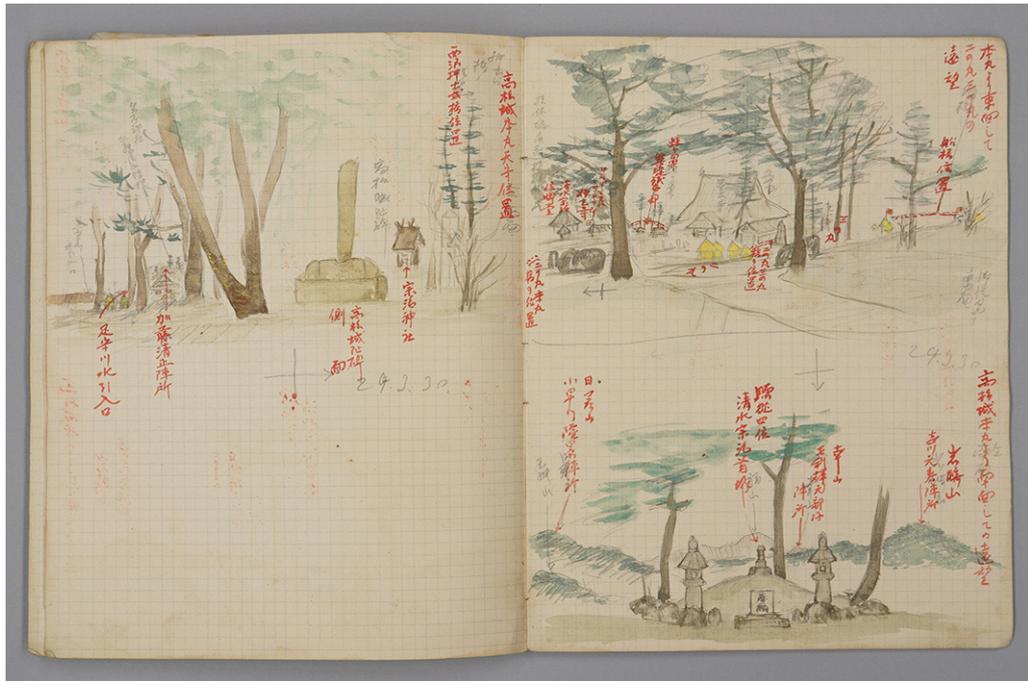


11-1 高田馬治『備中高松城水攻戦図』

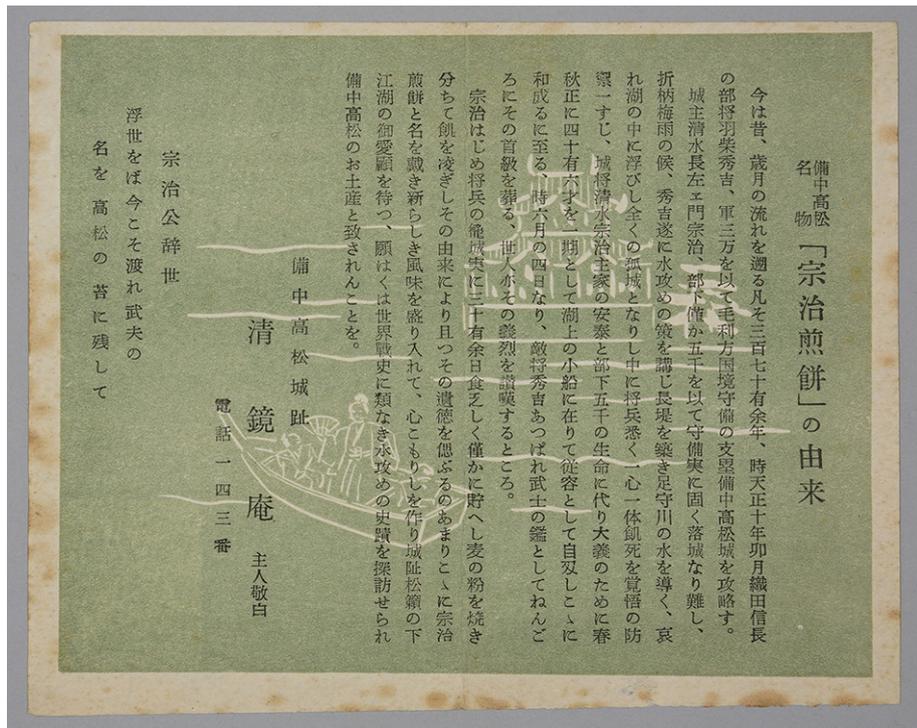
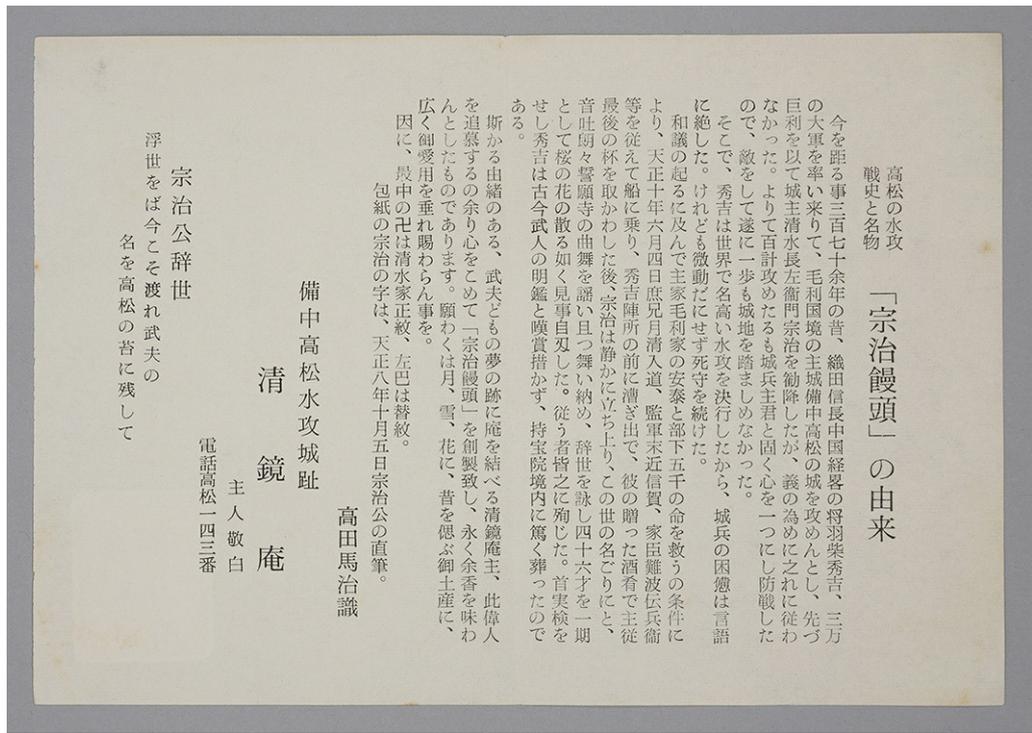
年代の記載なし 39.0cm × 53.8cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/40-3）

包みの紙には、昭和24年4月2日に行われた皇太子（現在の皇）の高松城址訪問に際して、卓上に置いて説明に用いたものとの書入れがあります。このほか7-6の絵図2点と8-2の中の瓦片1点も、このときに台覧に供されています。



9-1 高田馬治「水奉行遺跡研究実測記・花房職之研究記録・秦原寺礎石古瓦散布状況調査考古学会へ発表記事」ノート別の頁
 作成年不詳 20.4cm × 15.8cm
 岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/37）
 水奉行遺跡のところでも紹介したこのノートには、昭和24年4月2日の皇太子行啓への説明に備えて事前に現地で描いたスケッチも含まれています。



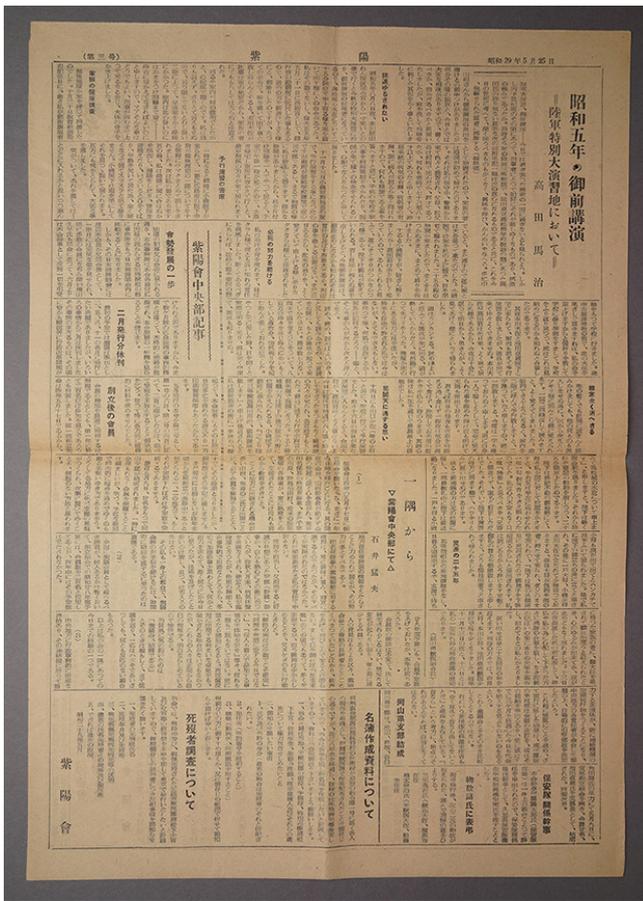
11-3 「宗治饅頭の由来」、「宗治煎餅の由来」しおり

清鏡庵（作成）、高田馬治（解説）

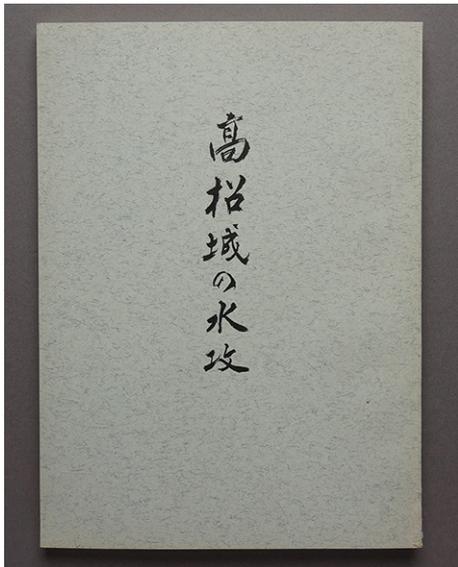
（饅頭）10.8cm × 15.5cm （煎餅）11.3cm × 14.1cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 095.88/1,2）

高田馬治の資料の中で、高松城址に隣接する和菓子店、清鏡庵の菓も保存されてきました。名物の「宗治饅頭」の菓には、高田馬治が城址の由来を記した解説文を書いています。煎餅のほうは署名がないので清鏡庵での作成かもしれませんが、その志を受け継いだものです。城址を訪れた人々の思い出にと、簡潔な中にも心づくしの説明がなされています。



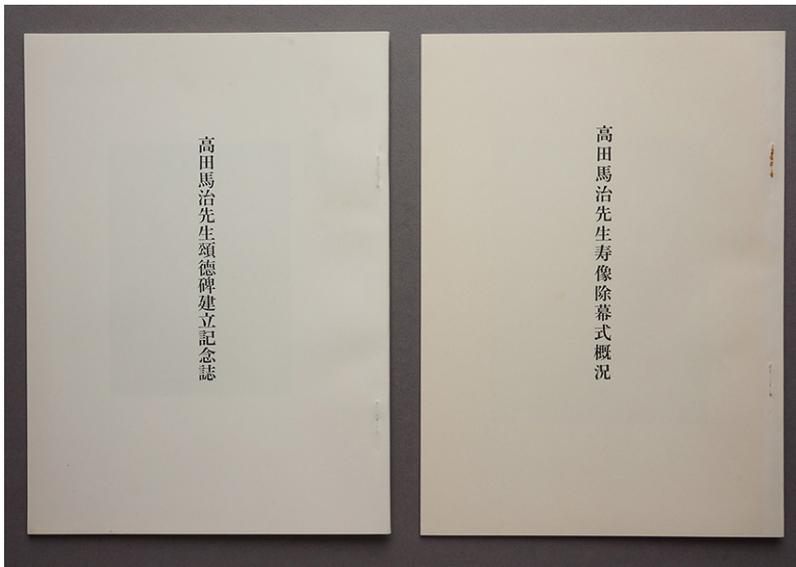
11-4 高田馬治(著)「昭和五年の御前講演 一陸軍特別大演習において一」
『紫陽』第3号、2頁、昭和29年5月25日、紫陽会(発行)所収
高田直芳氏出品資料 38.7cm × 27.0cm
「その頃の国状と、今日では大変な相違がありますので」と断りつつ、乞われて御前講演に臨んだ時の緊迫した心境を回想した文章です。この資料は発行後に相当の期間を経て閲覧の機会も少なくなっていると考えられるので、本書78-79頁に内容を再録しました。
なお、11-4から11-6までの資料と、展示の中で紹介した昭和33年に高松農業高校(もと高松農学校)の同じ部屋で御前講演を再話した音声記録は、孫の高田直芳氏からのご提供です。



11-5 高田馬治（著）『高松城の水攻』

昭和40年11月16日、高田馬治先生頌徳会（発行）21.0cm × 15.1cm
高田直芳氏出品資料

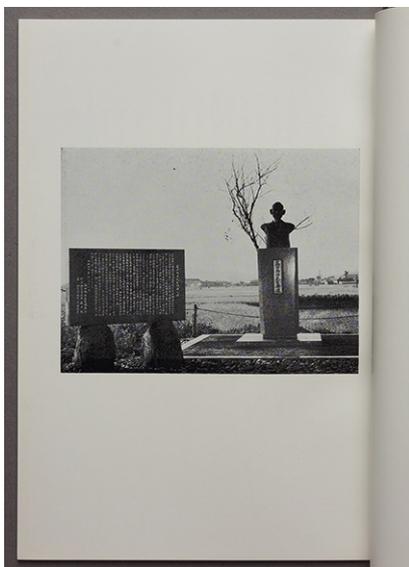
御前講演の原稿と、昭和4年の『備中高松城水攻戦史』、および清水宗治首塚埋納物の埋め戻しの経緯などを収録した冊子です。城址に高田馬治の頌徳碑が建立されたときに作成されたものです。



11-6 『高田馬治先生頌徳碑建立記念誌』、
『高田馬治先生寿像除幕式概況』

昭和40年、高田馬治先生頌徳会（編、発行）
各21.0cm × 15.0cm
高田直芳氏出品資料

高田馬治は銅像の建立を辞退し続けましたが、人々の熱意に抗しきれず胸像の設置を渋々認めました。像は史蹟保存への貢献から当時の文部省に承認され、城址内に建てられています。像銘の撰者は藤井駿氏です。



『高田馬治先生寿像除幕式概況』の
口絵の一部



石井山 秀吉陣地の東北端にある古墳の内部

撮影時期の記載なし

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/58-1）

古墳の内部、北端（左）と南端（右）の写真です。高田馬治は古代史にも関心があり、水攻め堤防が人工の構造物と気づいたのは古墳に興味があったからでした。



備前国府の跡

撮影時期の記載なし（戦後の早い頃か？）

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.11/1）

高島村国府市場（現在の岡山市中区国府市場）の風景です。



楯築遺跡

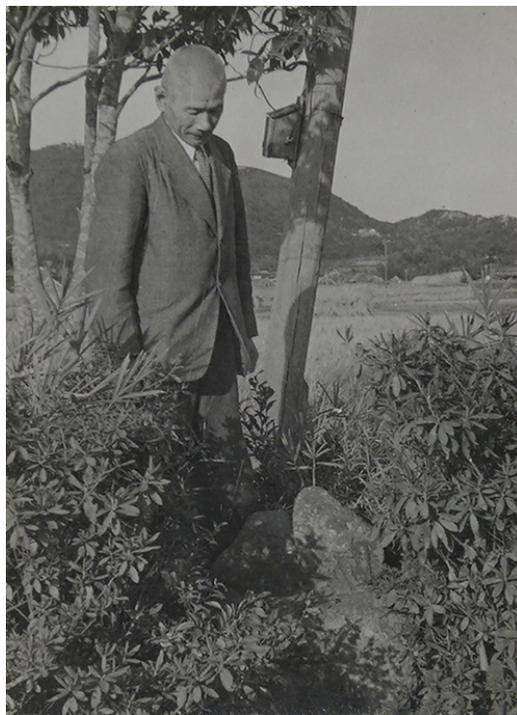
撮影時期の記載なし

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.913/19-2）

倉敷市矢部に所在する弥生時代後期の遺跡です。この頃の遺跡は鬱蒼とした松林に囲まれ、巨石が傾いて倒れかかっています。



11-7 水奉行遺跡の破壊を報じる新聞記事
 (毎日新聞) 昭和41年11月27日、(山陽新聞) 昭和41年11月28日
 (図書館で製本された状態の表紙の大きさ) 29.9cm × 21.2cm
 岡山市立中央図書館蔵 (高田文庫 092.89/36)
 長野川の水奉行遺跡の一部が道路工事で破壊されたことを報じる新聞記事です。高田馬治が歿する1年余り前のことですが、左下に朱字で「実に驚き入り言葉なし」と書き入れられています。



本丸跡に佇む高田馬治

しますと、二字違っていたと申しますので更に一回致しますと、今度は一字も違つておらぬと申します。更に自分一人で暗しようにして、完全に覚えられた事を確めた時は夜も明けて太陽も差出ております。

思えば昨日の昼食も軍服を着換える為に食はず一昨夜は気分が悪くて食はず、洗面してお茶漬の飯をカキ込みし時のうまさ、其時の味は私一生を通じて最高最上の御馳走でした。

至誠天に通ずる思い

十四日にも川口少佐(後の少将)と共に、学校に行つて予行演習をした。愈々十六日の当日が来た講演室に入らんとすると、金田大將が、高田君硬くなる事はないよ今日は親任官待遇だから等と励まして下さつたまつまもなく親補職の方々が来られ、各宮殿下も入られた。最後に陛下が行幸主務官の御先導で臨御になつた。すると親補職の方は陛下の後方数歩の所に位置をかえられると、小磯閣下が御前に進み出られて、「之より陸軍三等獣医高田馬治、御前講演を致します」と申し上げ後退されると私は御前数歩の所に一歩進め「謹みて高松城の水攻について申上ます」と申しますと、陛下は軽く御会釈を賜りました。それから油絵や要図の軸物を指しつ、二十五分間言上したのであります。

陛下は終始不動の御姿勢にて、時々私が図に対して位置をかえますと、半右又は半左に向わせられ一句一句御首肯をさえ賜わつたのでした。私は心の不安もなく只一度「隆景」と云うべきを「元春」と間違つて、直ちに訂正しただけでした。それでいて陛下は薄雲の彼方に居ます様で、ハツキリと今に思い出せぬのであります。

終ると親補職の方は元の位置に復し、一同最敬礼中に陛下は御退場になりました。一戸大將と小磯少将も涙が出て出てとハンカチで涙をふいて居られました。後で私に陛下の御立ちの所に立てと申され、その後は一戸大將、小磯少将本川大佐が立たれて少時待つておられますと、奈良大將が包物を他の者に持たせて来られ、ボンのまま受取られて、「陛下は殊の外御満足に思召

されたので御菓子を下賜相成るから」と差出されます。私は誠にありがとう存じます宜敷く御礼の言上を御願致しますと申しますと、どうも御目出度うと申されて帰られました。

変遷の二十五年

其後幾組かの現地講演をなし、日暮る頃帰宅するや、玄閣で待ちに待つた家族の者に、御大任を果されて御目出度うと迎えられたとき、心のゆるみが出来てか、涙が止めどもなく流れました。十三日の夜決意した机の前に座して、神仏や私の為に心配して下さつた方々に感謝の合掌を致し、なき両親の位はいの前に本日の光栄を報告し、初めてもとの私にかえりました。

思い出せば早二十五回目の年を迎えます。当時の方々は、奈良大將、本川少将、池田卓蔵獣医少将位で残り少くなりました。毎年十一月十三日の夜と、十六日とは私の一生忘れ得ぬ感激最高の歴史であります。

*昭和二九年五月二五日に紫陽会から発行された会報紙『紫陽』第三号の二頁(裏面)に、編集にあつた山根という人から請われて高田馬治が昭和五年の御前講演のときの事情を回想し、執筆した文章が掲載されています。本展へ孫の高田直芳氏から提供いただいたこの資料を、同氏の許諾を得て再録します。

*濁点や句読点の脱落があり、表記の不統一もみられますが、明らかな誤植のほかは原文のままにしています。

*小見出しは編集で付された可能性もありえなくはないと思われましたが、そのままにしています。

*本文の前にあつた編集者の文は省きました。

高田馬治（著）「昭和五年の御前講演 —陸軍特別大演習において—」

山根さんから御前講演の思出を書けとの御申つけがありました。が何分その頃の国状と、今日とは大変な相違がありますので、書くべきか、書かざるべきかと思案いたしました。意を決して当時骨に銘じた其俣をかく事といたしました。

辞退ゆるされない

昭和五年八月八日夜、本川岡山れん隊区司令官から一寸来いと
の事で行くと今秋の特別大演習に当り、御前講演の候補者になつ
ているので、高松城の水攻について二十五分間位で申上得る様な
案を書いて出す様にとの命令があつた。

私はその器でないし、尚大正五年五月二十一日に摂政宮として、
御行啓の節御前に呷尺した事もあるので、適當の方を御選び下さ
る様にと、御断りしたのですが、たつての命令で、案を書いて出
す事と致し帰らんとすると、本川大佐が此事は軍の秘密だから、
家族の者にももらしてはならぬと注意された。

帰るや家内が何の御用でしたかと、心配顔で聞くのです。私は
偽りも云えず、さりとて云えませぬので、云う限りでないといひ
暑い二階に上つて、早速案をかく準備にかかつた。家内は此の暑
いにはかまをつけ羽織まで着て・・・浴衣に着かえてなされ
ばよいのにと申しますので、マアそんな事はどうでもよい、用事
が済むまで上つて来るなど命じ、大体の骨子をかき上げました。

家族の健康調査

爾後幾度か案を練つて持参したのでした。十月三十日教育勅語
発布記念日に、愈々私が御前講演者として発表されたので、家族
の者は疑問が初めて解けたのであります。それは私の留守中、警
察から来て色々調査され、父母、祖父母は何病で死んだか、何

才であつたか、何れも老病で七十乃至八十才以上であつたと申
しますと、神経系統の病気の有無、病弱者の有無、現に病人が
居るか等と問はれますので、何れも健康である事を答へますと
更に、子供の学校や家の事を根掘葉掘りきかれたり、医師が来
て種々の検査をせられるので、心配でならなかつたと申して居
りました。

十一月十三日小磯軍務局長の前で、予行演習をする事になつ
たのですが場所が師範学校講堂で軍の司令部であるし、まるで
物置の様に机は散乱して居ります。僅かな時間がありましたか
ら、机を片付け掃除を一人でやつて居ると、予定の午後一時が
迫つたので、大急ぎ帰宅し軍服に着かえて行くと、最早関係の
方々が来て居られません。

予行演習の苦慮

一時になると同時に小磯閣下が来られて、一番に広島県の坂
下中尉が備後歴史の一部についてを十分間程にウマクまとめて
話しをされました。次は私の番であります其の時、私は時間
間に合はぬかを掛念し、掃除をしたり、軍服を着換えたり、い
ろいろと心をくばり、平静を欠いて居た為、全く硬くなつて居
てスラスラと出て参りません。小磯閣下は案を手にしてそれを
見つつ聞いて居られます。其方にも気を取られて、大切な事を
落しました。

気がついて、あれを落しては・・・どこに入れるかと思ひ
つつ進んでいると、また落すので遂に案とは大分違つて来たの
でした。小磯閣下は案を机の上に置き、目を閉じて聞かれまし
た。二十五分程の時間が来ましたので、まとまりはつかぬままに、
まとめて終りを告げました。

すると小磯閣下が、皆さん解りましたか・・・高田君は余り
詳しく知つているので、あれもこれとも思ふて、遂にまとまり
がつかなくなつた様である。陛下は御耳が肥えていられる。若し
意味の解らぬ事を申し上げると、今後御前講演は、御取止めに
なるかも知れぬそれは責任の及ぼす所重大である。沢山の事を
申上る必要はない、まだ三日あるから、此案の通りを、よく覚

えていて申上げる様に余りカタクならぬ様にと注意されました。
必死の努力を続ける

私は冷汗が背を流れます、目はクラム様で何とも云い知れぬ責
任を痛感しました。斯くてあるべきにあらねば、油絵の額や要図
の懸軸をもつて学校に行きました。途中吉備津神社の前で、此の
大任を果さして頂きますれば、私の命を差上げますからと御祈り
を致して学校に参り準備をすまして、学校をふり返り見つつ、或
はこれが見納めになるのかも知れぬと合掌したのであります。

其夜本川大佐と池田卓蔵閣下と宅に来られて、家内も混えて予
行演習を致しましたが、雑念が出て来て仲々よくできません。本
川大佐が高田君は先日來、よく寝て居らぬ様であるから、今夜は
十分に眠つて明日から、奥さんが、よく見てあげる様にといつて
帰られました。

頭はカンカンする。読めばよいと思ふても雑念が先に出る。頭
が熱しているからだど、風呂場に行つて水ゴリをとつた。幾度か
床の上にある軍刀に目を注いだが、勝手な自由の許される私では
今はないが、とてもできえもしない。事終つて後、何処で自決す
るか・・・家族は如何なるだろう・・・等と、そんな事のみが次
から次へと浮んで来る。

読め、読め、読めばよいのだ、と又しても読みかけるが、一頁
読まぬ間に、もとの雑念が起つて来てしかたがない。最早致し方
ない両手で頭を支えひじをついて、八百万の神々を念じ静かにめ
いもくしている事数分、突然戦リツを起し殆んど座しておれぬ位
でした。

やつと元に復した時、目を開くと電燈は明るく光り、頭は全く
空虚で、雑念も起りませぬ。

雑念全く消へさる

唯の暫くでも此間に読まんと思ひかけましても、他の何ものも
混入しませぬ為、次から次へとハツキリ脳に刻みこむ様に覚え
られます。一回二回繰返して読みますと、よく覚えてしまいまし
た。愈々暗誦できるようになると、家内を二階に呼んで予行致

映像作品

「空から訪ねる備中高松城」制作：米島慎一（当館映像ディレクター）

上空からの映像で備中高松城の全貌を捉え、紹介した映像です。

「御前講演を再現 高松城の水攻に就いて」話者：高田馬治 音声記録提供：高田直芳 編集：米島慎一

高田馬治の孫の高田直芳氏から提供いただいた、昭和5年の陸軍特別大演習の進講（御前講演）を昭和33年11月16日に高松農業高等学校（もと高松農学校）の同じ部屋で再話し録音した音声記録へ、理解の便のために関連画像と見出しを加えたものです。

参考文献（抄）

瀬川秀雄「高松城の水攻及び城将清水宗治の首塚に就て」『史学雑誌』第20編第11号（通編第240号）、明治42年（1909）11月10日、史学会

小野田嘉久二『備中高松遊覧の栞』明治43年（1910）、田中書籍店

永山卯三郎「備中高松の水攻に就いて」『岡山師範学校校友会誌』大正8年（1919）、岡山師範学校校友会、36-49頁

吉備群書集成刊行会（編）『吉備群書集成』（三）、大正10年（1921）初版、昭和45年（1970）復刊（歴史図書社）（『備前軍記』、『中国兵乱記』、『備中兵乱記』、『備前国人佐柿常円入道物語』などの軍記を収録）

吉田秀臣（編）『高松農学校校友会々報』第22号（行幸記念号）、昭和6年（1931）11月16日、岡山県高松農学校校友会

上田三平『日本史蹟の研究』昭和15年（1940）、第一公論社

高田馬治『昭和五年特別大演習 御前講演の大意を果して』（発行年・発行者の記載なし、昭和5～6年頃か）

高田馬治『武人の典型 備中高松城主清水長左衛門宗治公』昭和7年（1932）3月15日、細謹舎書店

高田馬治『郷土史料 高松城の水攻』昭和10年（1935）11月16日（初版）、岡山県高松農学校

高田馬治『孤城を守る清水宗治』昭和17年（1942）11月、岡山市

高田馬治「昭和五年の御前講演 一陸軍特別大演習において一」『紫陽』第3号、昭和29年（1954）5月25日、紫陽会、2頁

高田馬治『高松城の水攻』昭和40年（1965）11月16日、高田馬治先生頌徳会

岡山県歴史人物事典編纂委員会（編）『岡山県歴史人物事典』、平成6年（1994年）、山陽新聞社

市川俊介『備中高松城の水攻め』（『岡山文庫』184）平成8年（1996）、日本文教出版

林信男（編）『備中高松城水攻の検証 附 高松城址保興会のあゆみ』平成11年（1999）、編者発行

高橋伸二『備中高松城三の丸跡発掘調査概報』平成12年（2000）、岡山市教育委員会

高橋伸二『備中高松城水攻め築堤跡—高松城水攻め築堤公園建設に伴う確認調査』平成20年（2008）、岡山市教育委員会

別府信吾「清水宗治像の再検討 一顕彰のさまを検証する一」『岡山県立記録資料館紀要』第4号、平成21年（2009）、19-42頁。

西村幸夫『「歴史的環境」概念の生成史』『日本建築学会計画系論文報告集』（その1）340号、昭和59年（1984）、101-110頁、（その2）351号、昭和60年（1985）、38-47頁、（その3）358号、昭和60年（1985）、65-74頁、（その4）452号、平成5年（1993）、177-186頁

斎藤智志『近代日本の史蹟保存事業とアカデミズム』平成27年（2015）、法政大学出版会

*古い文献には現在入手が難しいものもありますが、本書で紹介する資料との関連から主要なものを挙げています。

備中高松城 —史蹟の保存と継承—

発行日 令和3年（2021）7月14日

発行者 岡山シティミュージアム◎

〒700-0024 岡山県岡山市北区駅元町15番1号

リットシティビル南棟4・5階

電話 086-898-3000

okayama-city-museum@city.okayama.lg.jp

撮影・執筆・レイアウト 飯島章仁（当館館長補佐）